

を捨てて銃劍によつて大東亞廣域經濟圈確立に挺身してゐる著者の上に幸多かれと祈るとともに、本書が、單に専門家に限らず、一人でも多くの知識人に讀まれることを期待するのは、單に筆者ひとりの友情からばかりではないのである。(昭和十六年九月、有斐閣刊、菊規格三二八頁、定價參圓參拾錢)。(中山)

ベルディアエフ「歴史の意味」

宮崎 信 彥譯

我々は現代が既に近代と時代を異とする事、即ち近代の指導理念は最早現代の指導理念にはなり得ない事を自覺してゐる。この現代の指導理念が如何なるものかは未だ明確に規定出來ぬにせよ、かゝるものを強ひて過去に求むるならば、それが中世の指導理念と著しく類似する事が認められねばならない。現代が新しき中世であるとは實にこの意味ではなからうか。そして現代の混亂と危機は中世から離脱し神を見失つた近世が自己清算の苦悶であるならば近世迄の歴史を中世以前の精神から分析し、その歸趨を解明する事は誠に興味ある事と云はねばならぬ。ベルディアエフは正にこの觀點に立つものと云へよう。何故なら彼は「誠實なるロシアのギリシア正教徒」であるが、ロシアは或意味に於て歐洲の外に存する即ち近世を持たなかつたのであり、更に西歐思潮最も中世的なるカトリックでさへ宗教改革を経過する事によつて人文主義的洗禮を受けてゐるのであるが、ギリシア正教はこの重大なる

精神革命の圈外に立ち現在迄その精神は「根源に近く保持」されて來たからである。既にベルディアエフは「歐洲が人文主義の可能性を行き盡して中世の暗に進みつゝある」事を「新しき中世」なる論文に於て述べてゐるが、この著はかゝる彼が正面から歴史の問題を問題とした點に限りない魅力を提示するものである。彼の思想及びこの譯の臺本となつた英譯本については既に史林二十三卷一號に中山氏の優れた紹介があり、私はこゝでは單にこの問題の書が宮崎氏の麗筆によつて我々の言葉となつた事を大いなる歡びを以て迎へるにとゞめたい。既に邦譯を見たマリタンやドゥソンの諸著など、共にこの著は多くの新鮮なる示唆を我が國史學界に授けるであらう。たゞ譯文は、思想的に難解と云ふ點もあらうが、時に意味の把握に困難なる部分があるのは遺憾である。よく讀めば勿論理解出來る位のものではあるが、しかし讀書の勞を省くと云ふ爲の努力、例へば代名詞などは不正確な國語の缺を補ふためにもそれに適合する名詞を入れて頂いたらと思はれる點などが存する。しかしそれは瑕瑾であつて、英譯の名文の味ひを簡勁なる筆致を以てよく邦語に移された譯者に敬意を表してこの粗雑なる紹介を終りたい。(敵愾書房發行、B 6 版、定價貳圓)(會田雄次)